

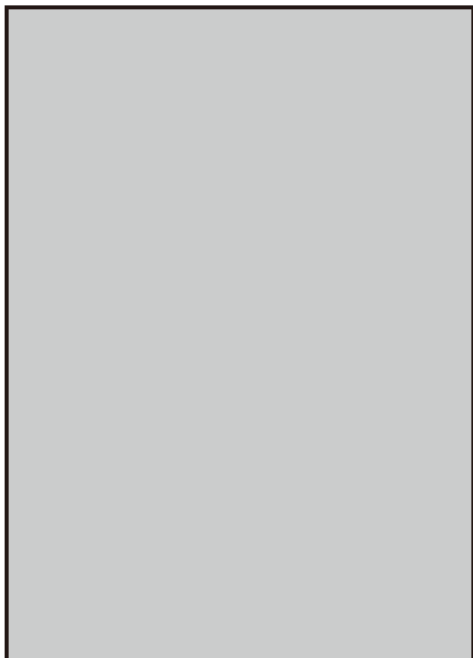
楠部彌弑の鶏香盒

今年は酉年です。正月には新聞や雑誌、その他諸々で鶏の絵や写真がよく登場していました。私も年賀状に利用させていただきまし、いくつかの新年のあいさつでは、鳥のように羽ばたき飛躍する年にしましょうなどと、月並みな言い方でしたが使っています。そこで酉年にちなんで、美術館の所蔵作品の中から、楠部彌弑の鶏の形をした香盒を取り上げてみました。

現在、美術館には楠部彌弑の茶碗や壺、香盒、皿、酒器など三十数点が収蔵されています。これらは、開館時に購入した花瓶一点を除き、そのほかはすべて、2001年および2005年に寄贈されたものです。ご寄贈いただいた服部氏の話によりますと、いずれも昭和初期、作者・楠部彌弑が京都から四日市の服部家を訪問し、作品を残していったということです。このころの楠部は自身語っているように、生活は大変苦しかったようで、服部氏は作品を買ったりして、この若い作家の援助をしていたと思われる。楠部は苦しい生活の中にあっても、研究心は旺盛で、中国や韓国の陶磁器、日本の焼物などの古典を熱心に研究していました。これら寄贈された作品を見ても、古い作品の技術やデザインを研究していた様子や、アール・デコなど、新しい芸術様式を作品の中に生かそうと試みている様子がうかがえます。

名品あり、新しい試みの作品あり、古典の研究作品や実用的な器もありと、なかなかバラエティーに富んだコレクションですが、その中に十二支を題材にした置物、香盒が十数点あり、独特の情趣を出しています。これらはその年々の縁起物として、また記念にいくつも制作されたもので、型による成形です。詳しい調査はまだですが、これら十二支をテーマとした作品は、所蔵されていた方の話や作風、銘などを総合してみると、昭和7年以降、10年代のものがほとんどだと思われます。

鶏の形をした《壽鶏香盒》はその中では、もっとも早い時期の作品だと考えられます。楠部はちょうど酉年にあたる昭和8年、名前を彌一から彌弑に変えています。この作品は共箱で、蓋裏に「彌一(印)」とあります。また、昭和7年第13回帝展に入選した《青華鳳鈕盒子・高杯》の盒子を小型にして少し変更を加えた《鳳鈕繡文菱花式香爐》があり、その箱書の書体や印がこの作品と同じであることなどから、香盒と盒子・高杯はほぼ同時期の作と考えられます。したがって、この香盒は酉年の新年に合わせて、昭和7年に制作されたものであろうと推測されます。なお、昭和8年・酉年に、楠部は第14回帝展で特選を得、作品は宮内省買い上げとなって、作家として認められただけでなく、長年の貧乏暮らしが少し楽になり、一息つけたと言うことです。(Sm)



楠部彌弑《壽鶏香盒》1932年 高5.9×3.1×4.7cm 服部友氏寄贈